２０２４．６．３０（日）使徒１６：２５～３４

16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。
16:26 すると突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった。
16:27 目を覚ました看守は、牢の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。
16:28 パウロは大声で「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。
16:29 看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。
16:30 そして二人を外に連れ出して、「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。
16:31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
16:32 そして、彼と彼の家にいる者全員に、主のことばを語った。
16:33 看守はその夜、時を移さず二人を引き取り、打ち傷を洗った。そして、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けた。
16:34 それから二人を家に案内して、食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ。

＜説教＞

使徒パウロたちのピリピ伝道では、まずリディアという女性が主によって心開かれ、福音を聞いて主イエスを信じました。彼女とその家族の者たちがバプテスマを受け、リディアは自分の家をパウロたちの伝道の拠点として献げ、ピリピに教会が誕生しました。

しかし、そこでは悪魔もまた働き、パウロたちの働きを妨害することになりました。若い女奴隷に取りついていた占いの霊に向かってパウロがイエス・キリストの名によって命じると、ただちに彼女から霊が出て行きました(18)。生ける神の御子の力によって女奴隷は悪霊の支配から解放されました。と同時に、この女奴隷を利用していた主人たちからは金儲けの望みがなくなった（直訳「出て行った」）のでした。怒った彼らはパウロとシラスを捕まえて、〈広場（町の中心地で人々が多く集まり、裁判も行われていた場所）の役人たち〉のところに引き立てて行き、「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」と、ありもしないことを長官たちに訴えました(19-21)。群衆もパウロとシラスに反対して立ったので、長官たちはすぐに二人の衣をはぎ取ってむちで打つように命じ、何度もむちで打たせてから二人を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じました(22-23)。むち打ちの刑を受けた二人は看守の手に渡され、木の足かせをはめられて奥の牢に入れられたのです(24)。

ユダヤ人の会堂もないような、圧倒的な異教の地で、ようやくリディアとその家族が主イエス･キリストを信じ、救われました。また占いの霊につかれた女奴隷が悪霊の支配か

ら解放されました。そこまではよかったけれど、すぐに悪魔とその支配下にある人間の妨害が入って来ました。確かにそのような迫害はペテロやほかの使徒たちも経験し、パウロ自身も既に経験していたようなことではありました。とは言え、そのような迫害は何度経験しようとも、生身の人間にはその度に嬉しいものではないと思います。せっかく神に召され、聖霊に導かれてマケドニアに来てからそんなに長くもなく、まだ宣教の働きも充分に果たしていないと思われるのに、早々とむち打ちの刑を受けて体は傷だらけで痛み、牢屋にぶち込まれ足かせまでつけられて自由に動くこともできない。ピリピでの福音宣教はこの先どうなるのか、神は一体何をお考えになっているのだろうか。そんな風に考えて彼らは神に不平を言ったでしょうか。もちろんそうではありませんでした。

〈真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入ってい〉ました(25)。〈真夜中ごろ〉とありますが、おそらくは「真夜中になっても」ということだったと思います。牢屋に入れられたときも、むち打たれていたときも、さらにあの主人たちに捕らえられたときも、ということだったと思います。彼らはいつも神に祈りつつ、神を賛美していたはずです。それを、たとえ捕らえられ、無実の罪で訴えられ、いきなり酷いむち打ちをされて体を痛めつけられ、暗い牢屋にぶち込まれ、体の自由を奪われた後でも決して止（や）めないで続けた、ということだったのでしょう。そして〈真夜中〉にも関わらず、〈ほかの囚人たち〉はパウロとシラスが神に捧げる祈りと賛美に〈聞き入ってい〉ました。これは即ち、神のことばを聞いていた、福音を聞いていた、主イエス･キリストについての証しを聞いていたに等しいと思います。神に祈りつつの賛美ならやはり「詩篇」かなあ、などと思いますが、それはさておき、パウロたちが牢に入れられなければ、既に牢に入っていた〈ほかの囚人たち〉が神のことばを聞くことはありませんでした。「この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません」（Ⅱテモテ 2:9）とやがてパウロは言いますが、それはこのときピリピでも経験したことでした。

さてそんな中で〈突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしま〉いました(26)。もちろんこれは単なる自然現象ではなく、神の力による、神のみわざでした(cf. 4:31、5:19、12:7,10)。

〈目を覚ました看守は、牢の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとし〉ました(27)。厳重に見張るように命じた長官たちから厳しく責められ、責任を問われるくらいなら、いっそのこと…ということでしょうか。

しかし〈パウロは大声で「自害してはいけない。私たちはみなここにいる（から）」と叫〉びました(28)。「自害してはいけない」とのパウロのことばの中に、看守は「死ぬな」ということ以上に、「新しく生きよ。救われよ」という意味を聞き取ったのでしょう。

パウロとシラスの祈りと賛美、大地震、牢の中でのできごと、全てを用いてやはり主が看守の心を開いてくださったに違いありません（たとえ一時的に眠りこけていたとしても）。〈看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。そして二人を外に連れ出して、「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言〉いました(29−30)。

〈二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」そして、彼と彼の家にいる者全員に、主のことばを語〉りました(31−32)。〈先

生〉(30)の直訳は「主」ですから、看守はパウロとシラスに何か神的な力や恐れを見ていたのかもしれません。しかし二人は、看守もその家族も信じて救われるべき「主」は自分たちではなく、イエスだと証ししました。そして〈彼と彼の家にいる者全員に〉その信じるべき〈主イエス〉とはどのようなお方なのかを語りました。つまり〈主のことばを語〉りました。主イエスの福音を語りました。主イエスは十字架で「私たちのすべての咎をその身に負われ、私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれ、彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに私たちが癒やされたお方」(cf.イザヤ53:5−6)だと。主イエスは墓に葬られ、三日目に復活なさり、天に昇られ、父なる神の右に着座され、今は聖霊をお送りになり、世の終わりまでいつもともにおられるお方だと。あなたは先ほど「明かりを求めた」(29)が、主イエスこそは本当に求めるべき、世に来られた「光（明かり）」だと。あなたも少し前に聞いていたかもしれない、あの占い女奴隷が叫んでいた「救いの道」(17)とは、これまであなたがたが拝んできたギリシア・ローマの神々ではなく、主イエスなのだと。主イエスを信じる者はだれでも、新しく造られた者として新しいいのちに生きるのだと。等々、主イエスのことを語り教えたのです。

そのようにしてパウロとシラスを通して〈主のことばを聞き〉〈主イエスを信じた〉看守とその家族にはもはや恐れはなく、信仰と喜びに満たされ、神のみこころにかなう歩みを始めました(33−34)。

聖霊に導かれ、主イエスを信じ、主のことば、福音を語る人がいるところでは、世の中であれ家族の間であれ、必ず悪魔や人間の妨害があります。しかし、神の力、主イエスの福音の力はそれらに必ず打ち勝ち、主イエスを信じる人をお救いになるのです。